

山の百名花 番外編

同人会員 木村 博

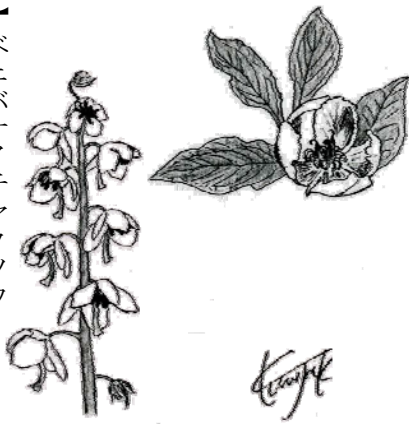
【107】ベニバナヤマシヤクヤク

立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。言わずと知れた日本女性の理想の姿である。ユリについては、日本は世界に冠たる国といえる。あの豪華なオリエンタル系カサブランカは、主として日本産のユリの交配によって誕生した。一方、ボタン属の花の中で、日本に自生するのはヤマシヤクヤクとベニバナヤマシヤクヤクである。

人が容易に近づけない山中の花の自生地に詳しいのは、山菜採りや虫屋とよばれる昆虫好きの集団である。彼らは目的のためなら、崖や藪はものともせず、少々の危険は顧みずに山の奥深くへと踏み込んでいく。ヤマシヤクヤクにはこの花だけに特化したフタスジカタビロハナカミキリがいる。そこで、虫屋の恰好の標的になるのである。そんな彼らについて行った金沢近郊の藪山ではじめてこの花に出会った。その清楚さに身が震える思いであった。

芍薬であるから「薬」である。漢方、芍薬甘草湯は山で足がつつたときのための私

の必携品である。しかし、薬は過ぎれば毒となる。シカが増えすぎたある東北の島では、えさに不適な棘のあるものや毒草がはびこっている。ヤマシヤクヤクよりやや小型のピンク色の花をつけるベニバナヤマシヤクヤクは全国的に散在するが、その自生の情報は少ない。盗掘をおそれるからであろう。しかし、この島は、あのピンクの華奢な花を確実に観察できる場所として、虫屋の間ではつとに有名である。



【108】ベニバナイチヤクソウ

一種類の草が利尿、降圧、抗菌など、多彩な効果をもつので、一葉草と名がついた。そんな便利な薬草ではあるが、栽培が困難なため多量には取得できない。なぜなのでしょう。ギンリョウソウが近縁であると聞

くと、なるほどと納得する。あの幽霊のような花は葉緑素を持たないので、当然自立できない。ベニタケ属のキノコから栄養をもらっているのだ。一方、イチヤクソウには立派な葉がある。が、一部の栄養は他から調達する必要があるらしい。ベニバナイチヤクソウでは、キノコを介してカラマツなどから栄養が移動しているという。道理で、カラマツの多い美濃戸山荘への林道脇にたくさん見られるわけである。

突然変異で花の色が抜けると白花になる。これをアルビノ（白化型）という。ベニバナイチヤクソウやベニバナヤマシヤクヤクにはアルビノが存在する。これらのアルビノは対応する白花種と同じ色かというところではあるが、レブンアツモリにもアルビノが存在する。一方、メダカでは白色である。黒が抜けるとヒメダカになる。さらに黄が抜けると白いメダカとなる。黄の代わりに白を除き、光を通さない「虹色」をとると、メダカの体は透けてしまうのである。